

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第 9 号】
平成30年
1月24日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

幸福で、満ち足りた、陽気な日本人

明治維新百五十年を考える

教育長 勝又 将雄



◇新年、あけましておめでとうございませう。今年は「戌年」。いよいよ平成三十年のスタートです。慌ただしい年末年始の休暇ではありましたが家庭生活で心身をリフレッシュできたでしょうか。様々な思いを抱いて新年を迎えたものと推測します。「日々新」の日常生活の積み重ねの先に見える「新しい自分・世界」を思っています。今年もよろしくお願ひいたします。

◇どこかで「明治維新百五十年を考える」的な話を聞いたり読んだりすることがあると思います。今年がその年となる

ります。一八六八年の明治維新を意識して、幕末から明治にかけての日本、及び日本人の姿を取り上げ、現在との違いを「なぜ？」的な論考展開しているものもあります。中でも当時の外国人の見た日本及び日本人に対する文章に驚かされるのが多々あります。すでに時代は流れて明治生まれの人々はほとんどこの世から消えつつあります。明治最後の生まれの方であっても百五歳となるわけですから、当然と言えば当然です。しかし、そうした現実を直視する中でも、残念ながら、「明治

「大正」「昭和」の元号の当時世相を振り返ることはなく、自分の体験から勝手に他界している明治生まれの祖父母との会話に、そうした現在との比較を意識するようなこともなかつたように思います。にもかかわらず、「なぜ今、幕末明治」なのか。(この百五十年で、日本人そのものの氣質が変わってしまったのか)という疑問が生じるほどの変化を見て取れることがあるからです。幕末・明治維新のころの日本及び日本人は、「幸福で満ち足りた、陽気な日本人」として外国人の眼には映って

いました。来日した外国人たちは様々な書物、文章を残しています。そこには驚くような表現がなされています。誰の顔にも陽気な性格の特徴である幸福感、満足感、そして機嫌の良さがありありと現れていて、その場所の雰囲気にとびつたりと融けあつて。絶えずしゃべり続け、笑いかけている。この民族は笑い上戸で心の底まで陽気である。一人、二人の特別な人の存在ではありません。当時の日本及び日本人を描いた大方のものにこうした文章、表現があります。「日本には貧乏人、貧困がない」という記述もあります。正確に言えば「貧乏人はいるが、貧困はない」ということでしょうが、身分を超えて、「格差」を感じていないことは事実だと思えます。「汁一菜」の食事に上下格差がない日本社会と言えます。それが、現代社会では電車の中ではスマホを黙々といじっているか、不機嫌そうな顔つきで虚脱している姿がほとんどです。仕事に、生活に疲れているのでしようか…。とても「幸せそう」には見えません。

読書をしている人の時折見せる顔の表情に面白い話かな、悲しい話かなという想像も生まれましたが、今は疲労困憊の姿以外ないような気がします。さてさて、百五十年前とのこの違いは何なのでしようか…。

そもそも、「幸福で、満ち足りた、陽気な日本人」となるような教育とはどんな教育なのでしようか。新しい年にこんなことをあれこれ考えているうちに三学期がスタートしています。新三学期制への移行によるその学校らしい、その学級らしい「締めくくり」を意識した年度末の教育活動に大いに期待しています。今年もよろしくお願ひいたします。



